二匹生活

函館市医師会
市立函館病院
南本　俊之

「この３匹の子たちの中で、お留守番ができそうなのはどの子ですか？」

「そうですねぇ、この黒い子はおとなしい子ですよ。抱っこしてみます？」

「…はい」

抱っこしちゃったらもうおしまい、今日は見に来ただけ、どんな子がいるか見に来ただけ、ただの目の保養だけ、絶対抱っこしちゃダメと思いながら、２割引きという魔力も加わり、抱っこしてしまったその黒い子は、生後３ヵ月目で体重１kg程度のオスのマンチカン。胸と腹に白いスポットがいくつかあるのが特徴です。抱っこした10分後には前金を払い、２週間後に引き取ることとなりました。夏の入り口、７月15日のことでした。

＊＊＊＊＊

実家で飼われていた猫がいました。隣家の三毛猫から生まれた、白と黒のハチワレの男の子。食い意地が張って、甘えん坊で、けんかが弱くて、近所のガキ大将のような野良猫に負けて足を引きずっている子でした。急に餌を食べなくなったと思ったら、あっという間に虹の橋を渡って行ってしまいました。今の自分の手元には、リビングのカーペットに寝転んであくびをしている彼の写真が１枚だけあります。

＊＊＊＊＊

「ねぇ、先生、猫、好きでしょう？　飼わない？」

「どうしたの？」

「実は昨日の帰りに猫を拾ったの。カラスにつつかれそうになっていて…。助け出してすぐに獣医さんに診てもらったの。幸い大きなけがは無かったんだけど」

外来のスタッフさんが見せてくれた何枚かの写真には、片手に乗っかりそうなぐらい小さい、青いお目目の黒猫君がいました。不幸にしてその時点では動物を飼うことが認められない借家で、その青目黒猫君は他の方に引き取られていきました。さらに不幸なことにもう１回似たようなエピソードが半年後にあり、９年近く住んでいたところを引き払い、職場に近い、動物を飼ってもいいところに引っ越ししました。年の瀬の12月21日のことでした。

＊＊＊＊＊

中年も終わったおっさんの一人暮らしでは、譲渡会で保護猫君は当ててもらいづらいです。モニター上に映し出される二次元猫を見て癒されるだけでした。

＊＊＊＊＊

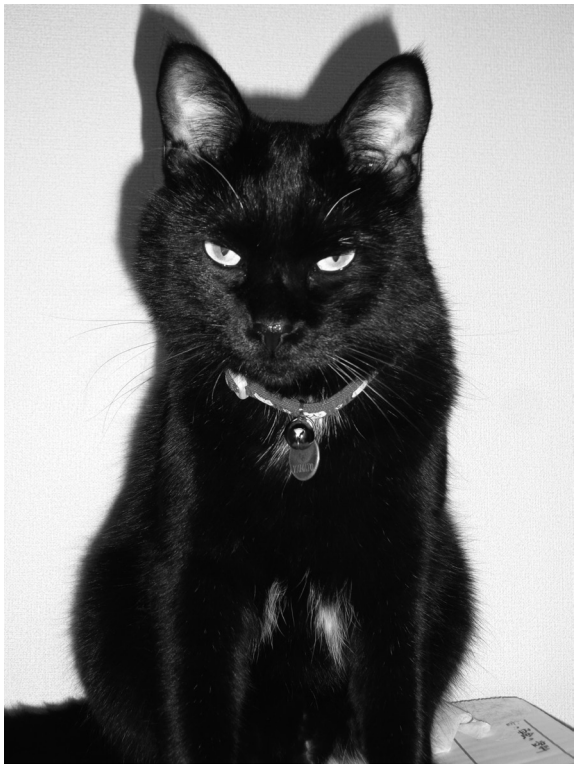
ふと職場で見かけたペットショップのチラシ。見に行ってみるかな、どうするかなと、煩悶していたら、

「見に行くぐらいはいいんじゃないですか？」

という別のスタッフさんの言葉に背中を押され、車の運転が苦手なのでチラシのお店と違うところに行ってみました。いました、いました、小さい子が何匹かいます。しかも２割引き。じっと見ること数分の後、恐る恐るお店の人に尋ねたことが、冒頭に書いたことでした。だって昼間は家に誰もいないんだもん。

＊＊＊＊＊

お迎えの車の助手席に置いたケージの中で、小さい声でミィミィ鳴いていました。連れ帰ったおっさんの一人暮らしの部屋にも慣れ、毎日けなげにお留守番に励んでくれています。おしっこ、うんこは決められた場所でしかしません、よくお店でしつけられたんだね、偉いね、と、文字通り猫かわいがりをする毎日です。自ら進んで膝の上に乗っかったといって喜び、朝３時から顔を足で踏みつけご飯を求め、それで怒られると、尻尾でやんわりと顔を撫でるようになってその賢さに舌を巻き、楽しい二匹生活を送っております。最近の猫は20年近く生きるそうです。この子が先に虹の橋を渡るか、今年53歳になるおっさんが先にくたばるかの競争ですが、できるだけ長生きをして面倒を見てあげたいと思っております。



撮影時点で１歳５ヵ月目になります。
体重は５kgにまでなりました。